

83 緒方惟準が武谷祐之に宛てた書簡（明治16年8月3日）

中山 茂春

医療法人白翠園春日病院／久留米大学医学部非常勤講師（医学史）

筑前福岡藩医武谷祐之（椋亭）は、天保14年（1843）に適塾に入門しています。帰藩後は藩主黒田長溥に医学校設立を進言、慶応3年（1867）に設立された福岡藩医学校「賛成館」の初代頭取になっています。この武谷家には、緒方洪庵からの書簡が21通、緒方郁蔵（研堂）からの書簡が1通、緒方拙斎からの書簡が2通、そして緒方惟準からの1通の書簡が残っています。これらは全て福岡県立図書館に寄託してあります。緒方惟準と武谷家の関係は、武谷祐之が適塾の門下生であるだけでなく、緒方惟準がオランダに留学した際に、武谷祐之の婿養子で武谷家を継いだ武谷椋山が同行しています。緒方惟準から武谷祐之に宛てた書簡は次のようなものです。

「拝啓、尔来御疎音多罪々々、平二御海容可被下候、時下大暑之砌高台御惣容様益御壮健被為在奉恐賀候 陳は迂生西部検閲被仰 付候、就ては不日貴地方え罷出候間、其節御青眉御清話承度楽居候、凡ハ来月廿四五日頃福岡着之心得御座候、先右御無音之御詫旁暑中御伺迄、早々如此御座候、謹言 八月三日 緒方惟準 拜具 竹谷老大人 玉机下 尚々恐入候得共、赤星住処不知二付、同人え御面会之節、来ル九月廿四五日頃小生福岡え罷出候旨御申伝願上候也」

（大意）ご無沙汰してしまい御許し下さい。お暑い折皆様お健やかで喜ばしい事です。私事西部検閲を仰せ付けられ、間もなくそちらへ行きますので、その節お逢いして御話するのを楽しみにしています。来月廿四五日頃福岡着のつもりです。尚赤星へ御逢いの折に私の着の日取りをお伝え下さい。（書簡の解説は斎藤美栄子先生の御指導を仰ぎました）

文中、西部検閲を迎え付けられとあります。中山沃著 緒方惟準伝（以下惟準伝と略す）によれば「明治16年7月13日西部検閲監軍部長属員仰せ付けられ、二等軍医落合泰蔵氏と共に同月21日出発、広島、熊本両鎮台及び其管下を巡回し、同年10月18日帰京す」とあります。この西部検閲の途中に9月24日、25日頃福岡に着いて、武谷祐之と赤星に会って話をしたいとあります。

「赤星とは、赤星研造のこと。筑前藩より長崎遊学を命ぜられ、ボードインに師事、惟準らと同時期にオランダに留学、明治三年ドイツのハインデルベルグ大学に転じ、七年に帰国。外科に長じ、宮内省侍医を経て大学東校の教官となり、のち仙台病院長兼附属医学長となる」とあります。

書簡には赤星は出てきませんが、緒方惟準や赤星研造らと共にオランダに留学した武谷椋山の名前が出てきません。その理由は少し複雑です、惟準伝には「武谷椋山（俊三）のこと。福岡藩医原田種彦の次男で、同藩医武谷椋亭（適塾門人）の養子となる。長崎に遊学し、ボードインに師事し、惟準らとともにオランダに留学、明治三年帰国し実家に復帰し俊三と改める。陸軍省に出仕、軍医学校附となり、のち大阪府病院、金沢病院に勤務した」とあり、実家に復帰しとあります。福岡の武谷家の伝承では、「武谷家と縁の深い原田家の次男で、学才があった原田椋山が武谷祐之の長女の敬之の婿養子となって武谷家を継ぎました。ただ、椋山は、福岡藩の官費でのオランダ留学中に放蕩して福岡に帰ること叶わず（後に祐之から離縁される）、金沢藩医学館に赴任するオランダ人医師スロイスの通詞として帰国したとの事です。武谷家に残る緒方惟準の唯一の書簡（明治16年8月3日）を御覧にしたいと思います。